

✿ 平原1号墓出土の重層ガラス連珠

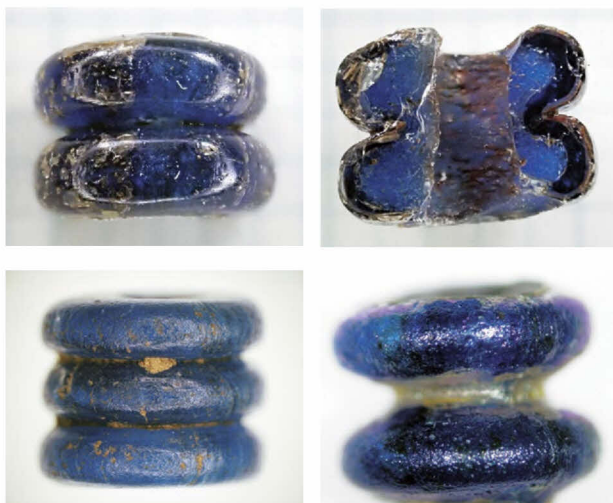
福岡県糸島市にある平原1号墓から特殊な重層ガラス連珠が886点出土しています。今回、これらのガラス連珠について材質調査を実施した結果、ナトロンと呼ばれる蒸発塩を原料としたソーダガラスで、アンチモンという成分を含むことがわかりました。このような化学組成のガラスは地中海世界で生産されたガラス（ローマガラス）の特徴です。

これらの重層ガラス連珠のうち、1点については過去にも分析報告がなされていましたが、製作技法および化学組成のいずれにおいても日本列島や近隣諸国に類例がなく、起源や流入経路も不明でした。しかし近年、筆者らによる海外調査において、形態的特徴の類似する重層ガラス玉が存在することがあきらかとなりました。一つはモンゴルで、匈奴の墓（ナイマートルゴイ遺跡）から出土しています。もう一例は、文化庁による奈文研とカザフスタン国立博物館の拠点交流事業のなかで、カザフスタン南東部の埋葬遺跡（カルカラ遺跡）から出土していることを確認しました。

そこで、平原1号墓出土品について改めて可搬型の蛍光X線分析装置を用いて非破壊材質調査を実施し、これらの海外資料との比較をおこないました。その結果、類似の化学組成をもつことが確認されたのです。

一連の調査研究により、平原1号墓の重層ガラス連珠は、当時ガラスの一大生産地であった東地中海沿岸地域で生産されたものが、ユーラシア大陸の東西を結ぶ交易路のなかでも北側の「草原の道」を通じて運ばれた可能性が示されました。

（都城発掘調査部 田村 朋美）



平原1号墓出土重層ガラス連珠(上)
カザフスタン(下左)とモンゴル(下右)の類例